

終戦直後から営林署勤務を経験された棧敷原久助氏（昭和3年生）と面識を得、営林署についての基礎知識や戦後の営林署の状況など様々なご教示を頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

- i 若井敏明『平泉澄—み国のため我つくさなむ—』ミネルヴァ書房 平成18年 29～32・330頁
- ii 平泉澄『中世に於ける社寺と社会との関係』至文堂 大正15年
- iii 船越昭治編著『森林・林業・山林問題研究入門』地球社 平成11年 62～66頁／『国史大辞典』第5巻（「国有林」「国民有区分」の項）
- iv 棧敷原久助氏の御教示と氏の私家本『対馬の林業—時代の流れ 今・昔の歩み—』『対馬営林署のあゆみ』平成20年
- v 宮本常一『対馬漁業史』未来社 昭和58年 300頁
- vi 九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院 昭和29年 378頁
- vii 棧敷原氏のご教示による。
- viii 厳原町誌編集委員会『厳原町誌』平成9年 47頁
- ix ここでの本題とはそれらが、平泉が対馬アジュール調査をおこなった大正8年、東大史料編纂掛にはイエール大助教授の朝河貴

- 一が滞在していた（大正6～8年）。比較法制史を専門とする朝河は鹿児島県入院で史料調査をおこない、大正14年に代表作『入来文書』を発表した。その翌年、平泉は彼の皇国史観の礎たるべき三部作『中世における精神生活』『中世に於ける社寺と社会との関係』『我が歴史観』を発表した。二人は大正アカデミズムのエリートであり（朝河は東京専門学校[現早稲田大学]を首席卒業）、世界における日本のあり方を強く意識していたが、その歴史観と政治活動は対極にあった。朝河は「熱なき光を」をモットーとして世界史の中の日本の姿を客観的に位置づけようと試み、平泉は「冥々の力」と精神性を日本の歴史に求めた。しかしながら両者のもっとも重要な研究が同時期・同じ場所で進行していたことは興味深く、近年両者の研究に対する再評価が進んでいることも附言したい（矢吹普2005-2007；若井俊明2002-2005；佐藤雄基2009）。
- x 宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫 昭和59年 182頁
- xi 『人文』1-1 日本文科学会 昭和26年 11頁
- xii 佐々木高明『日本の焼畑』古今書院 昭和47年 261～271頁
- xiii 弘長務「対馬の牧畑」『嶋』1-1 一誠社 昭和8年／折茂順平「対馬の焼畑（木庭）」『京都学芸大学学報』第1巻 昭和26年
- xiv 『人文』36頁／陶山訥庵『老農類語 刈麦談』農文協 昭和55年 6頁
- xi 『人文』149・208頁

## 対馬鰐浦集落にみる集落図・地籍図

津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）

### 鰐浦の町並

鰐浦は対馬の最北端に位置する漁村集落である。北に開く入り江の奥、谷筋の小河川に沿って集落は展開している。海岸緑りにやや広い広場（ベエ<sup>1</sup>）を開き、各戸の高床の小屋（倉）群を円弧状に山側に沿って建てる。それとは別に主家は小河川に沿って軒を接するように带状に配されている。

### 集落図

このような密集する漁村集落の骨格を把握するためには地図上に各戸の家屋などを配置した図（以下、このような図を集落図と呼ぶ）の作成が有効であると思われる。昭和25・26年に実施された戦後最初の九学会連合対馬調査では調査をした集落ごとに集落図が作成されている<sup>2</sup>。

鰐浦の場合を例（図1）に集落図の内容をみてみよう。



図1 『対馬の自然と文化』所収の鰐浦の集落図



海・小河川・道の略図が描かれ、四角く囲んだ主家らしきものを本戸と寄留者に分けて描き、寄留者には職業なども記号化して示している。また、小屋・余間・井戸・墓地・寺社を示し、ベェー・畑などを含めて模式的に示している。現地の観察や聞き取りを元に作成されたものと思われるが、よく出来た集落図である。しかし、模式図が描かれるのみで、残念ながら、図をもとにした分析はあまりなされていない。

その後も集落図は集落の骨格を把握する有効な手法だと判断されたとみられ、鰐浦調査ではたびたび九学会連合の調査の図をもとに、ほぼ同様な集落図が作成されている<sup>3</sup>。また、九学会連合調査以降に対馬で独自に行わ

れた調査<sup>4</sup>でも集落図が作成されている。対馬においては民俗誌調査のなかに集落図作成が定着しているようだ。

一方、九学会連合が実施したその後の能登調査や下北調査などでは集落図が作成されることはない。九学会連合の調査のなかではなぜか受け継がれることがなかったようだ。

集落図の作成は、実測し精度の高い図を作成するにせよ、観察・聞き取りなどによりある程度模式化された図を作成するにせよ、極めて手間隙のかかる作業を伴う。にもかかわらず、集落図を利用する方法論がいまだに曖昧なために、積極的に活用されていないのであろう。



図2 鰐浦新公図  
縮尺 1/500 の精度の高い実測図。地番が記入されるだけで、地目などの記入はない。

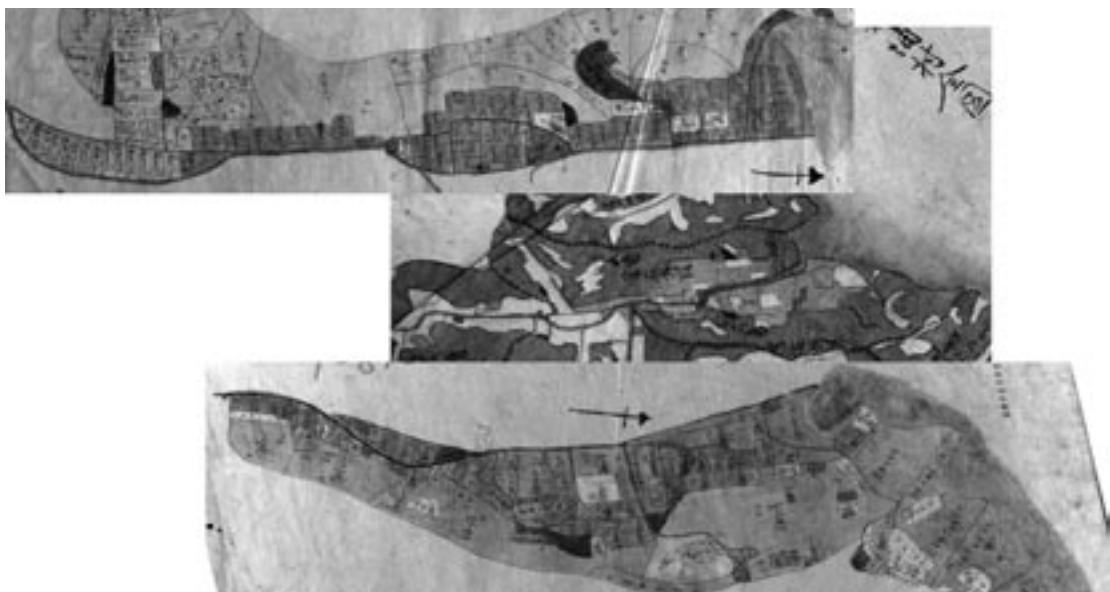


図3 鰐浦旧公図  
中央が「全図」、上の図が「在所陽」の小字図、下が「在所陰」の小字図。本来、両小字図は齟齬なく接続するはずだが、うまく接続しない。旧公図は実測図でないためである。地図としては新公図ほど精度は高くないが、地目別に色分けされるなど情報量は多い。

## 地籍図（公図）

集落図に近い資料に地籍図（公図）がある。土地に刻まれた歴史の解読に有効な公図が、九学会調査ばかりでなく、以降の調査においても、なぜか対馬の調査ではほとんど使われていない。

鰐浦を例に以下にその公図を見てみよう。鰐浦の公図は大きく分けて新旧2種がある。最新の公図は測図と称され、1996年の実測調査をもとに縮尺1/500で描かれている（図2）。一方、旧公図は作成年代が必ずしも明らかでないが、明治期の絵図が元になっていると思われる<sup>5</sup>。新公図のように実測をもとに作成された図ではなく、地図としては精度が落ちるが、地目別に色分けされ、相対的位置関係などは信頼できる（図3）。また、新旧ふたつの公図の間には、旧公図の変更箇所を部分的に修正した副図と称される図が数枚作成されている。これらによって土地の推移を時系列に追うことも可能である。

紙面の都合上、海沿いのベエおよび小屋群の部分に限って新旧公図を比較してみる。旧公図では該当部分は当初から地目は宅地で、比較的大きないいくつかの区画で区切られていることがわかる。一方、新公図を見ると小屋群部分は小屋ごとに区画が細分化され、ベエ部分も

各戸の持分ごとに分けられているようだ。かつて集落の共有地であったベエや小屋の敷地が個人の所有に変わったであろうことが読み取れる。新旧ふたつの公図を比較するだけでも、以上のような点が確認できるのである。

## おわりに

「持続と変容の実態の研究—対馬60年を事例として」では、九学会連合の調査による集落図をはじめとする情報に新旧の公図や土地台帳・登記簿をあわせることによって、実りある成果を上げたいものと考えている。

### 註

- 1 共同作業場
- 2 『対馬の自然と文化』九学会連合対馬共同調査委員会、古今書院、昭和29年9月。なお、この報告書に先立って、1年目の調査が終わった段階で出された『人文』（1、日本文科学会、昭和26年5月）の「特集・対馬調査」の「対馬の文化」のうち泉靖一担当「豊崎町鰐浦ムラの構造」に収録された集落図が、対馬調査における集落図の先駆けとなったものと思われ注目される。
- 3 「民家にみる生活空間の変容—対馬・鰐浦において—」（関根康正『環東シナ海文化の岸構造に関する研究—壱岐・対馬の実態調査』昭和54年度）、「鰐浦の集落構造」「離島の建築」（浅川滋男、日本の美術、No.406）などに収録された鰐浦の集落図はいずれも九学会連合調査の集落図をもとに作成されている。
- 4 地元の研究者永留久恵他による『対馬西岸阿連・志多留の民俗』（長崎県教育委員会、昭和48年3月）。
- 5 佐藤甚次郎『公図 読図の基礎』古今書院、平成8年9月。

# 第二回対馬調査報告書

磯貝奈津子（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程1年）

2009年3月17日から21日までの5日間、第二回対馬調査を行った。今回の調査の目的は、対馬各地域の地籍図や行政データを集めることであった。あらかじめ調査地点を大まかに、鰐浦・志多留・木坂・廻・豆酸・鴨居瀬・厳原と決め、それぞれの地区についての情報やデータを、市役所、旧町役場（現地域活性センター）、また図書館にて収集する計画を立てた。

まず、調査初日に厳原の対馬市役所へ行き、建設部管理課にて「旧厳原町道路図」を閲覧した。これは、厳原旧城下町の絵地図を撮影・プリントアウトしたものである。また、CD-ROM「対馬市庁管内基本図・林班及び正射図」（厳原町、平成15年5月対馬市庁林業部森林土木課扇精光）を見せていただいた。これは、森林基本図に林班、空中写真を落とし込んだデータである。今回

は閲覧しか叶わなかったが、今後の活動のために是非とも入手したい資料であった。

続いて訪ねた法務局対馬支局では、新しい地籍図を閲覧・複写及び撮影できたため、翌18日もかけて鰐浦・木坂・廻・志多留・峰分の閲覧を申請、撮影・複写を行った。この日はその後、厳原から途中、阿連、豊玉を通り、比田勝まで移動した。

19日、上対馬地域活性センターに赴き、旧上対馬調整要覧について尋ねたが保存版はなかった。但し、鰐浦の家屋台帳を申請すれば閲覧できることが分かった。その後、鰐浦地区を見学し地区全景を撮影してから、上県地域活性センターへ向かった。ここでは、旧町時代の町政要覧を閲覧することができた。また、志多留の家屋台帳閲覧についても、先と同様、申請すれば可能というこ